

## 麓 : 鹿児島県の地方都市にみる歴史都市としての姿

著者	揚村 固
雑誌名	都市計画
巻	186
ページ	51-56
別言語のタイトル	Historical Castle Towns and their form in Kagoshima Prefecture
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00008331">http://hdl.handle.net/10232/00008331</a>

# 麓：鹿児島県の地方都市にみる歴史都市としての姿

## Historical Castle Towns and their form in Kagoshima Prefecture

鹿児島大学  
建築学科助手

揚村 国

Kagoshima University  
Research Assoc.,  
Dept. of Architecture

Katamu AGEMURA

The domain of Satsuma, which during the Edo period comprised the entire Kagoshima Prefecture and apart of Miyazaki Prefecture, had more than one hundred characteristic castle towns called “Fumoto” (lit.: “foot of a mountain”).

The streets had their direction determined based on two types of geometrical axes. One of these axes was the castled mountain where one could look down on the townspeople’s area. The other was probably one or more characteristic landmark mountains surrounding the town.

These historical towns still exist today and can teach us about the concept of premodern city planning.

### 1. はじめに

鹿児島県の都市の殆どは近世初期に形成されたものであると言ってよい。江戸中期までに完成を見たこれらの封建都市は骨格を大きくかえることなくその多くが現代に継承された。それは「麓（ふもと）」<sup>1</sup>と呼ばれる武家集落であり、その数100を超え、鹿児島県96市町村のうち離島を除くほぼ全域に散在し、一部は宮崎県まで分布する。これらの武家集落はまた、落ち着いた居住環境と景観を良く保持していることに特徴がある。知覧麓<sup>2</sup>(伝建地区)や出水麓などが代表的な例である。

本報は、特異な形成史とその圧倒的な例に着目

し、鹿児島県における歴史都市としての麓集落と現代地方都市の関係にふれ、集落の構成と設計手法を考察することによって現代都市のあり様を考える際の一助とすることを意図するものである。

### 2. 歴史的背景と麓の分布

旧薩摩藩は領内の拠点を外城（とじょう）制度と呼ぶ本・支城のネットワークによって支配していた。戦国期の領内統一過程で重視された中世城を拠点とし、山下に蟠集した武士団の居住地がその基礎である。こうした中世城下は我が国において普遍的に存在した。しかし、徳川幕府禁令中一国一城令（1615年）により旧来の城郭は破却させられ、諸国に散在した戦国城下はことごとく消滅した。しかしながら薩摩藩は、城郭こそ破却したものの山麓に集住する武士団を禁令に反してそのまま外城に留め置いた。これら武士団の居住地（麓）には、計画性の高い都市形態を持ったものが多くあり、また、主要なものが消費経済の成立を示す「町場」を持っているなど近世城下町の形成を示唆する。こうした封建都市群は江戸期を通して一国に存在した城下町群<sup>3</sup>として他領に類例を見ない<sup>4</sup>。

麓集落の初源は明らかではない。史料上の初見は入来文書で名高い入来麓（当時入来院氏所領）のもので、文亀元年（1501）である。「麓」の呼称が島津家に帰するものでなく、既に16世紀初頭に



写真一 上空から見た出水麓の全体像

は諸豪の城下聚落に用いられたことを示す。

鎌倉以来の守護大名であった島津家は、ようやく16世紀末に三州（薩摩・大隅・日向）を統一して近世大名としての地位を築く。所領とした居城を抑え、武士団を駆逐したうえ配下の武士団を派遣して定住させ、その地の抑え役として本城から地頭を派遣して支配した。鎌倉以来の地頭制を用い、大幅な所替えによって地縁を排して統治するという支配構造を目指したものであった。所領となった拠点を外城と呼び、本城との支城関係を密接なものとした。外城は拠点となる外衛の城の意味からのちに支配地域全体を意味する地域的呼称となり<sup>5</sup>、さらに天明4年（1784）「郷」と改称される。外城は、始め固定せず、数も一定しない。制度的確立は延享元年（1744）頃で、数も113と定まる。

外城（郷）には地頭所（直轄地）と私領（島津一門家と諸豪家）二種がある。麓はそうした外城に原則として一つと考えてよい。直轄地は概して街道の要衝・国境に多く、規模が大きい。私領は内陸部に配される傾向があり、規模の大きいものは少ない。関ヶ原後の国防を考慮した大規模な所替えの成果を示唆している（図-1参照）。本来拠点の城の居住域であった麓は、16世紀末から17世紀初頭にかけて居住地として整備され、一部は江戸中期に移転拡充されて今日まで引き継がれる。

江戸期を通して薩摩藩の支配構造を支えた外城制度と麓は、明治を迎えてその役割を終えたわけ

ではない。一旦は郷が解体されて村単位に分解するが町村制施行（明治22）を機に、再び旧来の外城域が新しい行政区界を形成し<sup>6</sup>、麓には役場や学校が建設され<sup>7</sup>、行政と教育上の中心となる。政庁地頭仮屋の敷地が公共の都市施設として転用されている例は極めて多く、所在地と跡地利用の状況が判明しているものだけで数えると、役場・学校・公民館などの公共施設に転用された例が91%を数え、鹿児島市町村が他県と異なる著しい特徴となっている。即ち、麓集落は市町村制への移行を円滑なものとし、その中心的役割を担って現代にまで至ることになった<sup>8</sup>。

### 3. 構成と類型

先にも述べたとおり麓は外城域の核的聚落であり、軍事・政治・経済の中心であった。その初源的形態はいずれも中世の山城に依拠してその城隈に集住するものである。政治的には本城派遣の地頭支配を受け、その政庁として地頭仮屋を設け、周囲に武士団を住まわせる。麓域は外縁にことごとく大小の河川を認め、屋敷地を天然の堀川で囲周するように配慮されている。従来、軍事的色彩が濃いと述べられることの多い麓集落だが、大規模な城壁等はなく、政庁地頭仮屋も低い石垣を廻らせた館造りの簡素なものであった。街路は馬場と小路（シュェ）と呼び、仮屋前の馬場が幅員が大きい。その他稽古場・弓場などの鍛錬場を共有地に持つものが多く、社寺では島津家の制に倣い菩提寺と祈願所を要所に勧請する。

私領、地頭所の内大規模のもの、あるいは交通の要衝にある麓では町人の住む町場を備える。こうした構成は、単に武家の集住する特殊な聚落というよりはむしろ近世城下の惣構えに通底する。

麓の形態は、山城と麓位置、お仮屋と屋敷地、街路構成などにより大きく三種に類別できる。

第一は麓集落の祖形と考えられるもので、中世山城の周囲の谷あいには武家地を配するもので、街路形態が非幾何学的な自然形状を呈するものである。図-2に志布志麓を示す。

志布志麓は古くから庄内地方唯一の水門（港）という要衝にある。南北朝・戦国期を通して約400年の戦乱に明け暮れたが、1577年島津氏の軍門に降る。以後は大隅国境の要衝として地頭支配となり、幕末まで藩米の積み出し及び南海貿易港の役

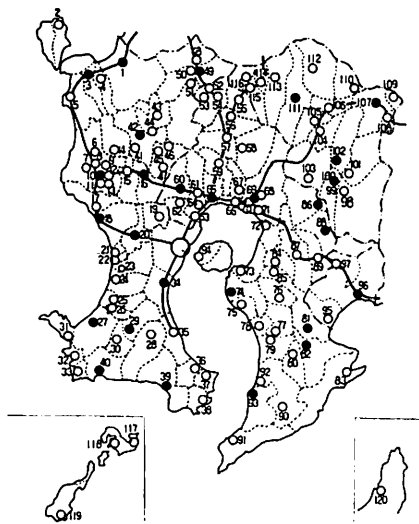
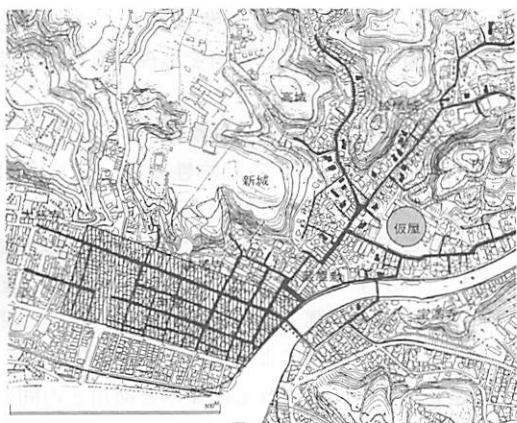
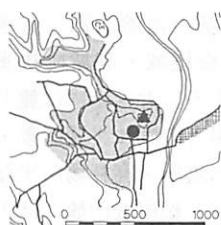


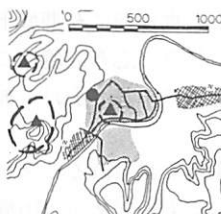
図-1 麓の領内配置 ●印は大郷の麓を示す



図一 志布志麓（1577）と類例



串良麓



加世田麓



羽月麓



清水麓



図二 国分麓（1604）と類例



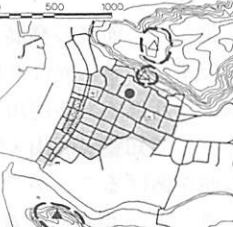
重富麓



出水麓



高岡麓



垂水麓



図三 知覧麓（1727頃）と類例



伊集院麓



宮之城麓



高山麓



加治木麓

割を果たす。地頭仮屋を内城の南端山裾に置き（現志布志小学校）、内城・松尾城・高城に挟まれた谷あいには武家地が展開する。近世末には麓と志布志千軒町と唄われた町場との間に、蔵屋敷・船奉行所・郡在番所・宿次伝馬所・高札場・牢などを集中配置していた。しかし松尾城山麓には古い石垣と街路遺構が残り、領主庇護下にあった社寺等の創建年とその位置から近世以前に初期城下が既に成立していたと考えられる。志布志麓はこうした類型の典型である。類例に串良、羽月、加世田、清水を示す。

第二は規模の大小を問わず多く見られることから麓集落の基本形と考えられるものである。山城のほぼ直下にお仮屋敷地（殆どが矩形）を定め、前面に広い街路（仮屋馬場・館馬場）を設け、前方に武士団の屋敷地を定める。街路は直線要素を持った格子街路で構成され、明らかに矩形街区形成をめざした計画性の高いものである。この例は多く、入来麓・高岡麓・出水麓・国分麓・重富麓など多数が存在する。ここでは国分麓他を例示する（図-3）。

第三は、前者の発展形とも言えるものである。お仮屋が前者と異なり屋敷地の中心部、あるいは本来外延部である河川近くに位置する。この種の例として知覧・高山・宮之城・加治木・伊集院その他をあげることができる。ここでは知覧を示す（図-4）。現在の知覧麓は、18世紀中期に第18代領主島津久峯が整備した。旧麓（第二類に属する）から政庁を麓川の対岸で出城亀甲城の西に移し、麓域を拡張して武家地の主要部を移転整備した。中世的理念において重要な山城を離れ、麓川の岸に領主お仮屋を定めた。伝建地区に選定されたこの地区を見れば、山城から最も離れた位置に思えるが、全体からすれば中央に位置している。高山麓は本城高山城（国指定重文）にあったものが、現在地に移したものである。知覧と同様、政庁（地頭仮屋）を弓張城の山裾を離れた武家地の中に配す。宮之城麓は成立が早い知覧麓と同様に、虎居城城隈をはなれ川内川に面して領主仮屋と蔵屋敷を配す。川内川が領内で最も大きな河川であり、物流の動脈となっていたことがその要因である。

この類例に属する麓群は旧来の位置から動いた

か、江戸中期に新たに拡張整備されたものであり、主たる要因が物流と経済を重視する近世的要請を反映した新しい類型であると言える。

#### 4. 麓集落の設計手法と景観構成

第二・第三類のように計画性の高い麓に着目し、これらはどのように計画されているか検討しよう。ここでは、入来・出水・国分・知覧の各麓について例示する（図-5～8）。（なお街路は江戸期の各種絵図・郷土資料・字絵図等と街路に関する歴史遺構の調査によって復元した<sup>9</sup>。）

先述したようにいずれも山並みと河川との間の平地に位置していることが共通している。

街路は直線要素で成り、格子型の街路構成を基本とし、矩形街区の形成を志向している。幾何学的要素を使う計画性を指摘できるが、その方向の決定がどのようになされたか明解でない。いずれについても街路は互いに平行でなく、直交もしない。入来・知覧では方向が一定でなく、出水では南北方向街路が扇型に開く。最も格子状に近い国分でも直交街路が偏向している。

しかし、それら街路の方向を外延して検討すると入来・出水・知覧ではこれら麓の拠って立つ中世山城の郭を通る傾向が見え、国分でも中心となる街路には同様の傾向がある。また、他端においても同様に周囲の山並みの特徴点や社寺の立地点等に向かっていないことを否定できない。（写真-2～9参照）

一方、こうした街路に沿って立地する武家の屋敷地は、街路に面した石垣と生垣を街路構成の要素に提供し、ほぼ原則的に庭園を街路側に配置する。住居は庭園の奥に配置され、接客空間を庭園側に開いて計画される。

即ち、麓集落の街路は基本的に山城と周囲の山並みによって決定され、街路空間には中景・遠景にその山並みが存在することになる。武家門が点在して街路両側に石垣と生垣が連続し、背後に武家住宅の屋根が見え、街路中央はるかに山並みが見える構成は、こうして住居地としての落ちついた景観を備えることになった。知覧麓の借景庭園は、このような条件の中での結果として成立したと考えられるのである。

麓集落にはいくつかの姿がある。第一に外城の名が意味する軍事都市であった。それは詰めの城



図-5 入来麓



写真-2 求聞寺城



写真-3 遠景



図-6 出水麓

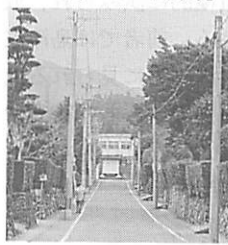


写真-4 亀ヶ城

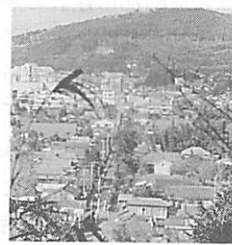


写真-5 遠景



図-7 国分麓



写真-6 愛宕社

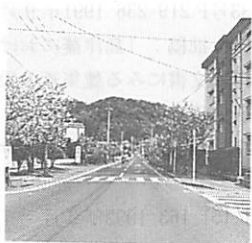


写真-7 金剛寺

図-8 知覧麓

写真-8 亀甲城(手前)

写真-9 遠景母ヶ嶽

55

としての山城と城館・武家地・堀としての河川が大きな構成要素である。麓を城域として捉え詰城の要所から敵が見通せる街路システムが必要であった。第二に麓は居住地としての城下町であった。矩形街区を分割して分け与える合理的な武士団の配置と処遇が近世の重要な課題であった。第三に麓は郷の中心となる都市であった。商品経済の確立を示す町場を抱撰又は付随させた都市としての条件を満たすものであった。

麓の建設手法はこうした側面から考察されねばならないだろう。特に前二者は、武家社会の根底に存在した軍事的理念に依って決定されたであろう。即ち、麓集落が城取りと屋敷の選地概念によって決定されたと考えてよい。第三の側面からは先進的都市建設の手法が積極的に試みられ、取り入れられたことが予見できる。前者では島津家に見られる修験者の重用や兵法文書に見られる風水説を援用した選地手法が指摘できるし、後者では島津家久の鹿児島本城、義久の国分に見られる格子状都市の事例がこれに該当する。

#### 5. まとめ：歴史都市研究の意義

現代都市は景観を持って余している感がある。近代都市計画が常に念頭に置きながら決定的な手法や方向を打ち出せないでいることは事実であろう。しかし現に、国内においても美しいと評価される都市が存在する。それらの都市の多くが近代合理主義以前の理念と手法によってなされた歴史都市である。こうした都市に学び、現代の都市形成手法に援用することは無益なことでないだろう。麓の街路設定が居住環境を取り巻く山並みによって決定され、結果として良好な街路景観を導いたという事実がその一例である。

この意味において、鹿児島県に歴史都市が多く存在することは幸運と言わなければならない。

#### 【注 記】

1 「麓」の字儀について、島津家列朝制度（文献3）は次のように説明している。「外城ハ、御居城外所諸ニ有之候一城ニて候、外ハ 御居城を内城云意ニて、所諸之城ハ皆外衛之城と申儀ニて、外城と相唱候哉、然ば一所之城を指て、外城と可唱を、一所之地を、惣体外城と唱来候と相見得候、城中士人召置候所を府下フモトと唱候ハ、一所之本府と申儀ニて可有之、干今古代之城隈ニ郷土共居候處を麓と唱候、城之下フモト又ハ城之府下

の意成べく候。」一般には「麓」、三国名勝図絵には「山下」、その他「府下」「府元」「府本」などが散見できる。史料上は、山口文書文亀元年（1501）に「清敷麓、屋敷一ヶ所、島中彦五郎（十日市後、今ハ犬ノ馬場ナリ）として登場するものが最も早い。

2 知覧以外にも麓は多数存在する。例えば「一垂水、二蒲生、三知覧」と読まれるように美しい町が存在した。これらはいずれも鹿児島を代表する麓集落である。

3 ここでの城下町は、政治・軍事的都市であることと、武士団に特化した住居地であること、そして流通経済システムとしての町場を包含あるいは並存させ、これらが一体的に形成された計画的聚落と定義する。

4 例外はいくつか存在する。天領以外では伊賀上野城（藤堂氏）、備後三原城（浅野氏）、陸奥青森城（津軽氏）、肥後八代城（加藤氏）、尾張犬山城（尾州公）などわずかである。（文献2p.422）

5 島津家列朝制度（巻ノ六）三二二（文献4.p.177）

6 文献3等による

7 各郷土史誌と現地調査によっている

8 町村制施行の目標では戸数400～500戸を標準的規模としていたが、旧来の郷が数村から十数村を基礎とした鹿児島県ではその規模が他県より大きく、谷山郷のように戸数4500を数える巨大な町が誕生した。（文献3による）

9 それぞれの復元根拠については日本建築学会の研究報告並びに学術講演梗概集に報告した。また、これらを取りまとめた3編を鹿児島大学工学部研究報告に発表した。（参考文献の項参照）

#### 【参考文献】

1 鈴木公：「鹿児島県の麓・野町・浦町の地理学的研究」私書版昭45（1970）

2 玉置豊次郎：「日本都市形成史」理工学社 昭49（1974）

3 正込政夫ほか：「鹿児島県市町村変遷史」鹿児島県昭42

4 藩法研究会編：「藩法集 8 鹿児島藩上」創文社 昭44

5 拙稿：「島津藩における麓集落に関する研究—街路設計手法について—」鹿児島大学工学部研究報告第33号P.219-238 1991年9月

6 拙稿：「島津藩における麓集落に関する研究—島津家文書にみる麓集落の設計理念—」鹿児島大学工学部研究報告第34号P.143-150 1992年9月

7 拙稿：「島津藩における麓集落に関する研究—屋敷割について—」鹿児島大学工学部研究報告第34号P.151-163 1992年9月